「美しい門の前で」 2022 年 6 月 5 日ペンテコステ礼拝説教

申命記 １８章 １８節～１９節

わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。 彼がわたしの名によってわたしの言葉を語るのに、聞き従わない者があるならば、わたしはその責任を追及する。

使徒言行録 ３章１節～２６節

ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。 すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しをこうた。ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。その男が、何かもらえると思って二人を見つめていると、ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。彼らは、それが神殿の

「美しい門」のそばに座って施しをこうていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。

さて、その男がペトロとヨハネに付きまとっていると、民衆は皆非常に驚いて、「ソロモンの回廊」と呼ばれる所にいる彼らの方へ、一斉に集まって来た。これを見たペトロは、民衆に言った。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようと決めていたのに、その面前でこの方を拒みました。聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くしました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです。ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分かっています。しかし、神はすべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このようにして実現なさったのです。だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。モーセは言いました。

『あなたがたの神である主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。彼が語りかけることには、何でも聞き従え。この預言者に耳を傾けない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる。』預言者は皆、サムエルをはじめその後に預言した者も、今の時について告げています。あなたがたは預言者の子孫であり、神があなたがたの先祖と結ばれた契約の子です。『地上のすべての民族は、あなたから生まれる者によって祝福を受ける』と、神はアブラハムに言われました。それで、神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださったのです。それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福にあずからせるためでした。」

１， 教会の誕生日

本日はペンテコステ礼拝です。ペンテコステと聞いてまだなじみがないと思う方もここにはおられるかもしれません。キリスト教会の三大祝祭日の一つであります。聖霊降臨日と言います。この祝祭日は、クリスマスやイースターと比べて、世間ではまだまだ認知度の低い祝祭日であると思います。

私たちは、クリスマスとイースターを教会の祝祭日として心を込めてお祝いしております。クリスマスにはアドヴェント。（待降節）イースターにはレント（受難節）という期間があり、それぞれの時を待ち望む心が養われていくものでありますが、ペンテコステには、そのような待ち望む日がないこともあって、少し疎かにしがちであるかもしれません。ペンテコステにおいて私たちが毎年思い起こしたいこと。それはペンテコステとは、教会の誕生日であるということです。主イエスが復活されてから 50 日が経ち、五旬節の日に、主が約束してくださった聖霊が弟子たちに降りました。この聖霊の大いなる働きの中で、イエス・キリストの福音が宣べ伝えられ、信じて救われる者が全世界に増え広がり、キリスト教会が広まっていったのです。そして、私たち諏訪教会もまたこの聖霊の働きによって私たち一人一人が集められ、信仰を与えられて、今年は創立 112 周年記念を迎えるのです。1 世紀以上も、聖霊がわたしたち諏訪教会を守り導いてくださっているからこそ、今もここで礼拝をささげることが許されているのです。このペンテコステの出来事は今もここで続いているのです。その聖霊の働きの中で、今も救われる人が興されていくということ。そして私たちもその主の働きの中に巻き込まれ、キリストの証し人とされたということ。その恵みの事実をしっかりと受け止めていくことで、私たちの、神への信頼は確かなものとなっていくのではないでしょうか。教会は聖霊によって始まりました。そして聖霊に導かれて、聖霊によって世の終わりまで守られていくのです。このことを信頼することを忘れると、教会としてのアイデンティティーがなくなってしまいます。それは最大の誘惑であるとも言えるのではないでしょうか。私たちは主の大宣教命令によって福音を伝道していますが、しかし主イエスがその伝道の業にいつも先行してくださっているということをここで深く受け止めて行くことが、今日の御言葉において示されていることであります。

２， 美しい門での出来事

 さて、本日はペンテコステ礼拝ということで、聖霊降臨の出来事を御言葉として聞いていきたいと思います。いつも第 2 章の、弟子たちに聖霊が降った箇所を聞いておりますが今日は、その後の 3 章の物語を御言葉として聞いていきます。ペトロとヨハネが午後三時の、決められた祈りの時間に神殿に上って行きました。何のためか。やはり彼らも祈るためであったと思います。しかしそれだけでなく、聖霊による促しによって神殿に向かったのかもしれません。ペトロとヨハネは、聖霊が自分たちの内に深く働いておられることをはっきりと自覚し、喜びと畏れの中で、次に主は私たちに何を命じられるのだろうかと思っていたと思います。

 そこで彼らは足の不自由な一人の男に出会います。この男は生まれながらに足の不自由な男であった。そして、このあと読んでいきますとわかるのはこの男は 40 歳を過ぎていた。つまり 40 年間生まれてからずっと自分の足で歩いたことがなかった。そういう人であったのです。彼は他人に施しをもらって生きておりました。その日も、そのようにして施しのために運ばれてきた。美しい門と呼ばれる神殿の門に置いてもらって、道行く人から施してもらっていたのです。彼を運んだ人はおそらく家族か、親しい人であったのでしょう。このような生き方しか、この時代の体の不自由な人には選択肢がなかったのです。生活に困窮している人々への行政の助けとか国の社会福祉制度とかいったものはなかったのです。彼には、人に施しをもらって生きて行くしか術はなかったのです。

３， わたしを見なさい

そのような男にペトロとヨハネは向かいます。そして「わたしを見なさい」と語りかけます。彼は、何かもらえるのだろうと思いました。お金か、あるいは食べ物でももらえたら儲けものだと思ったでしょう。彼がそう思っていることはペトロとヨハネは百も承知でした。しかしペトロは、そのようなものは持っていないと言います。

しかし、お金よりもはるかに素晴らしいものをあげようと言います。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」すると奇跡が起こりました。彼の萎えていた足に瞬時に癒しが起こり、足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、そして歩き出したのです。この人は、その日暮らしの小銭を期待していたのに、自分で生きるための力が与えられたのです。他人に依存しながら生きざるを得なかった生活から、自分の足で立ち、仕事をして生きる力を神から与えられたのです。何より、ここから彼は、キリストを信じて、命の道を歩む者とされたのです。これが「ナザレの人イエス・キリストの御名」がもつ力であります。ある人がここでこのように語ります。「しかし、これは決して異能を行うための呪文ではない」と。主イエス・キリストの御名。この御名を用いてペトロ、ヨハネがまるで魔法使いのように人を癒したり悪霊を追い出したりする、そういう特殊能力のように考えられては困るのです。彼らは急にそのような不思議な能力者となったのではありません。ただ、神の霊がペトロや、使徒たちを支え、彼らを用いて主イエス御自身が御業をなさっていたのであります。ですから、このあとの物語を読んでいくとわかりますように、信じていない者が、いたずらに主イエスの御名によって悪霊を追い出そうとして、逆に酷い目に遭うという出来事がありますし、ペトロとヨハネが人々の上に手を置くと聖霊が降るのを見て魔術師シモンがその力を金で買おうとして厳しく断罪されております。神の賜物は人間の自由にはならないのです。畏れと信仰をもって神に仕えるときに、神の御業によって用いられる。ただそれだけであります。聖霊の働きを私たちは自由にできない。聖霊が神であられる限り、神の霊に従わなければならないのです。主に従いきる中で用いられる。使徒たちの大いなる働きは全てのそのような服従の中での出来事であります。神を畏れずに、軽々しくこの御名を唱えるなら、それはみだりに御名を唱える罪であります。しかしペトロが、イエス・キリストの御名によって歩きなさいとこの男に命じたのは、ペトロがキリストの御名が持つ権威の中に。その中心にいたということでありましょう。そこに聖霊において、キリストが働いてくださったのです。ペトロが、「イエス・キリストの御名によって」と語ったときに、ペトロを通して主イエスがこの足の不自由な男を癒したのです。

 しかし、この箇所が示しております大切なことがあります。それはこの男に癒しが起こったことではなく、彼に信仰が与えられたということです。信仰によって歩き出したということ。それこそが彼の人生にとって最も大きな出来事でありました。また、この出来事を見た人々に、ペトロが語った説教によって、キリストを信じて救われる人が起こった。第 4 章 4 節を見ますと、このペトロの説教を聞いて信じた人が男だけで五千人ほどになったとあります。女性や子供もいたと思います。そうするともっと多くの人がこの出来事を通してキリストを信じて救われたのであります。聖書の中で癒しの奇跡が行われた時、その記事が示していることは何か。それは神の国の支配が地上に来ているということでありましょう。それが聖霊を通してすでに来ているのです。この男は、足が癒されて、躍り上がって、神を賛美します。その男がいつも美しい門の前で施しを乞うていたあの男であることを、神殿にいた者たちは我を忘れるほどに驚いたのです。

４， 人を偶像化してはならない

この出来事を見た人々は、ペトロとヨハネのところに大勢集まってきます。それを見てペトロは大勢の人々にこのように語りかけます。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか。」

さきほど、ペトロはヨハネと共に、足の不自由な男に向かって「わたしたちを見なさい」と言いましたが、ここでは「なぜ、わたしたちを見つめるのですか」と言います。この違いを考えていきたいのです。ペトロは、「わたしたちを見なさい」と語ったあと、「持っているもの」に注目させます。それは何か。ナザレ人イエス・キリストの御名です。つまりペトロとヨハネが確かにもっているもの。それが、ナザレ人イエスの御名による権威であったということです。そしてわたしたち諏訪教会にも、この主イエスの御名が確かに与えられている。もっと言えば、わたしたち一人一人にも主イエスの御名が与えられていると言えると思います。そのようにして私たち一人一人が主イエスの御名を背負って歩むものとされているのです。それがキリストの証し人としての歩みでありましょう。ある先生が、伝道者たちにこうおっしゃいました。あなたがた牧師は、わたしを見なさい。そうすればイエス・キリストがわかるから、と言えなければならない。そういう生き方ができなければならない。そうおっしゃった。なかなか厳しいことだと思いました。しかしそれは自分の立派な行いを見せることではない。そうではなく私の内に生きておられる主イエス。わたしが主イエスを信頼して歩む。そこに確かに聖霊の働きが見えてくるから、というのです。そうであるなら、それは牧師に限ったことではないと思います。伝道者だけに聖霊が注がれているのではないのです。洗礼を受けてキリスト者になった人には例外なく聖霊が与えられている。そうであるならば、誰であってもその人をよく観察したら、その人を通してイエス・キリストが見えてくるはずであります。救われた者の生活。救われた者はなるほど、こんなふうに神様に栄光をあらわすのだと思えるような歩みをしていくこととなるのだと。確かにそれは本当のことであります。私の内にもイエス様がおられる。皆さんの内にもイエス様が生きてくださっている。聖霊が私たちの内に生きてくださっている。そのことがわかる。

信じて、永遠の命を確信して喜んでいる。主の御言葉を心から感謝してアーメンと言える。その意味においては、この私もまた、私を見てくださいと言って良いと思います。しかしそこで見てほしいと思うのは私自身の立派さではないのです。立派に見せようと思ってもすぐにぼろが出るに決まっています。

 確かにペトロには、ペトロという人自身には何も、誇るものはありませんでした。一介の漁師でしかなく、学校など行ったことのない人であったと思います。しかし、その何もないペトロに、イエス・キリストの名が確かに与えられていたのです。私たちもそうなのです。わたしたち諏訪教会もそうなのです。私たちの教会も有名であるわけではありません。大きな会堂やたくさんのお金があるわけではありません。しかし私たちは名声やお金で伝道するのではありません。人間の力で、立派さや良い証しで伝道するのでもありません。私はときに、諏訪教会の会堂にもっと人が集まればいい、などと言っていますけれども、それも、一番大事なことではありません。もっと大切なことはここにおられる一人一人が、本当に主イエスの救いを確信して喜ぶ教会であり続けるということです。聖霊に満たされ続けるということであります。あまり人数にこだわりすぎると、数が偶像になってしまいます。数を偶像にしたり、お金や人間を偶像にしたりする。そういう誘惑が伝道にはいつもあると思います。しかし、本質を誤ってはいけないのです。田舎の小さな教会が、その小ささの中で、小さい規模の伝道しかできないかというと、決してそうではありません。むしろその小さな教会の神への信頼が、どんな大きな教会よりも神の国を大きく証ししていくことだってあると思うのです。たとえ経済的には豊かではなかったとしても、私たちのささげて行く心が確かであるならば、主イエスがやもめのレプトン銅貨二枚の献金を喜ばれたように、今ある経済力で祝福してくださり、確かな伝道をさせてくださるに違いありません。キリストの御名は、そしてその御名を通して現れている神の権威、神の国の御支配。聖霊の働きは、私たちにも確かに与えられているからです。ペトロがここでなぜわたしを見つめるのかと言ったのは、ペトロ自身の力や信心によって、この人を歩かせたかのようにみられていたからです。ペトロ自身に、人を癒す不思議な力があるかのように、そこにいた人々が勘違いしたからです。そうではないとペトロは言うのです。教会において、どんな賜物がある人であっても、どんな魅力的な人であったとしても、その人があがめられてはなりません。そうではなく、わたしたちに賜物を与えてくださる神がいつも崇められなければならないのです。キリストの御名にこそ力があるからです。その御支配の中に従順に従って、伝道するのです。教会では決して人間が第一になってはいけません。神を畏れる人々の中でこそ、神は最も深い働きをしてくださるのです。それは教会に集う人をないがしろにしてよいということではありません。人々への配慮。気配りは大切です。しかしそれはいつも神を神とするということを忘れない限りにおいてであります。神を見つめ、神を神とすることを忘れたところで人間だけを見つめて行くなら、すぐに躓きが起こると思うのです。あるいは人間の偶像化が起こるのです。私たちはどうしても人の目を気にしてしまう。よく思われたいとどこかで考えてしまう。そこで偽善も生まれるかもしれません。偽善や躓きから自由であるためには、教会の内に確かに働かれる主イエス・キリストの御名に気付くことであります。教会に躓いた、とか牧師や教会には偽善があると批判するとき、その人はまだ教会が神の御名によって立っていることに気付かないので

す。しかし、そういう躓きというものは伝道の中でどうしても起こってしまうことでもあります。

５， ペトロの説教

ペトロはここから偉大な説教を語っていきます。ペトロはこの、足の不自由な人が癒されたのはイスラエル人と深い関係があることを、物語っていきます。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、私たちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。」（１３）イスラエルの神、聖書の神。彼らが拝んでいる真の、唯一の神の僕。それがナザレのイエスなのだ。初めにペトロはそう証ししていきます。神殿にいた人々はすでに、50 日以上前に、ゴルゴダの丘で起こった出来事をよく知っていたでしょう。しかしその後、彼らが十字架刑に処したナザレのイエスが、復活して天に昇ったことなどは知る由もなかったでしょう。ペトロは、16 節でこう語ります。「あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くしました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです。」ペトロとヨハネが、主イエスの弟子であったということを、そこにいた人々もわかったに違いありません。しかしあのとき、ユダヤ人たちは主イエスが、救い主であることを認めませんでした。しかしここで、40 年間ずっと足が不自由であった男がこの主イエス・キリストの御名によって癒された事実を見る限り、何の反論もできません。たたみかけるようにしてペトロは、告げます。命の導き手であった主イエスをあなたがたは十字架で殺してしまった。しかし神はこの主イエスを死者の中から復活させてくださった。このナザレのイエスこそ、モーセやサムエルなど、聖書の預言者たちが預言していた、来るべき救い主であったのだ。しかしこのような罪を犯したのは無知のためであったのだから、悔い改めてイエス・キリストを信じなさい。そのように告げていきます。ペトロがこのとき、美しい門の前の男を癒したのは、この説教を語るためであったと言っても過言ではありません。聖霊は、まさにこのイエス・キリストを証しする言葉を神殿にいる人々の前で語らせるために、一人の人を癒されたのであります。

ユダヤ人たちはそこで語られたペトロの説教が、彼らの父祖アブラハム、イサク、ヤコブの物語。そしてモーセなど、聖書の預言者たちが示すのがまさにイエス・キリストであることを信じざるを得ません。壮大なる主の救いの物語が、今そこにいる一人一人に確かに、そして新たに差し出されたのです。アブラハムから受け継がれていた神とイスラエルの契約は、まさに、この神の僕イエス・キリストを信じることで救いに与る。新しい契約となったのです。15 節でペトロは主イエスを「命の導き手」と語ります。命の創始者とも訳せる言葉です。主イエスはこの命の道を、十字架と復活によって私たちに確かに切り開いてくださいました。その救いの道。永遠の命がイスラエルだけでなく、ここにいる私たちにも差し出されております。第 4 章の 4 節では、このペトロの語った説教によってイエス・キリストを信じた人が、男だけで五千人ほどになったとあります。女性や子供も含めるともっと多くいたのかもしれません。聖霊がペトロを用いて、この地上にキリストを信じる人々を興していきます。聖霊の主権の下で、そしてイエス・キリストの御名がもつ大いなる権威によって、ペトロ、ヨハネ、そして使徒たちは伝道に遣わされていきます。聖霊によって押し出されていきます。ペンテコステ。聖霊降臨日とは、この聖霊による押し出し。聖霊が私たちの歩みにいつも先行してくださるのだということを想い起す日であると言えるのではないでしょうか。教会がイスラエルで誕生してから、全世界に教会は広まっていきました。わたしたち諏訪教会もまた聖霊によって信じる者とされた人々によって、112 年の歴史を歩んでおります。これからも聖霊の導きによって。イエス・キリストの御名によって歩むのです。本日は聖餐に与ります。この聖餐の中に、主イエスが聖霊において必ず共にいると約束してくださっております。このパンをわたしたちが食するとき、わたしたちはイエス・キリストの命の中に。キリストの御名の権威の中に確かに生かされているのです。この命の導き手。命の創始者によって、罪を赦され、救われた者として、この諏訪教会に確かに連なる肢として、わたしたちもまた主イエス・キリストを証しする者とされていきたいのです。どうか主の霊がわたしたちを用いて、神の御業を成し遂げてくださいますように。わたしたちも御国のために用いられますように。お祈りをいたします。

教会の頭であられる主イエス・キリストの父なる御神様。わたしたちの人生にイエス・キリストをお送りくださり、命の導き手として今も私たちを導いてくださっております。主イエスの霊が私たちといつも伴ってくださること。私たちの内に来てくださっていること。聖霊によって伝道が為されていくことを信頼いたします。これからもわたしたちにあなたが御言葉を通して、信じる人を興してくださいますように。わたしたちが聖霊に従順に従って行くことができますように。私たち一人一人を用いて、あなたの御業が為されますように。人間の力、人間の計画、経済力などではなく、ただイエス・キリストの御名を信じることにおいて、主がわたしたちの教会に生きて働いて下さり、守り、備えて下さり、導きを与えてくださることを信頼できますように。

 聖霊の御業が、全世界のキリスト教会に、世界の終わりに至るまで豊かに与えられていきますように。私たちの救いの証印として、聖霊が私たちの内におられることを確信していくことができますように。今日この御堂に集うこのとできない兄弟姉妹の上にもペンテコステの恵みが豊かに注がれますように。体の病気や、痛みと闘っておられる兄弟姉妹を深く癒してくださいますように。戦争が続くこの世界であります。この世界が炎に包まれることのないように、主よ、平和をお与えくださいますように。為政者たちを正しい裁きのもとに置いてくださいますように。地球温暖化も厳しい状況となってまいりました。主よ、この世界を憐れんでくださいますように。

言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン